

| | |
|--------------|--|
| Title | 24時間開館サービスの現状と課題(第18回大学図書館研究集会記録 21世紀における大学図書館の役割と責務 社会の多様化・個性化・共同化に対応した情報資産の蓄積、活用及び展開 第1分科会:学術情報の流通と共同化) |
| Author(s) | 中本, 悦子 |
| Citation | 大学図書館研究集会記録, 18: 51-57 |
| Issue Date | 2002-03-01 |
| Type | Others |
| Text version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/10119/3520 |
| Rights | 「研究集会記録」掲載の当該発表記録の著作権は、日本図書館協会大学図書館部会及び国公立大学図書館協力委員会に帰属します。本著作物は著作権者である日本図書館協会大学図書館部会及び国公立大学図書館協力委員会の許可のもとに掲載するものです。 |
| Description | |

座長：

第一分科会のラスト、7つ目のご発表でございます。北陸先端科学技術大学院大学の中本さんから「24時間開館サービスの現状と課題」というテーマでご発表いただきます。よろしく申し上げます。

24時間開館サービスの現状と課題

中本悦子（北陸先端科学技術大学院大学附属図書館）

中本悦子：

北陸先端科学技術大学院大学の情報サービス係の中本でございます。大学の名称は大変長いので、ここでは英文名の Japan Advanced Institute of Science and Technology の略称、JAIST とさせていただきます。

JAIST 附属図書館の「24時間開館サービスの現状と課題」について発表させていただく前に、まず JAIST 附属図書館がどのような図書館であるのか、概要を簡単にお話します。

JAIST は石川県にあります。平成 2 年に設置された我が国最初の国立の独立大学院大学で、昨年 10 周年を迎えたばかりです。学生の受入れは平成 4 年から始まり、知識科学研究科、情報科学研究科、材料科学研究科の 3 つの研究科があります。

JAIST 附属図書館は、キャンパスのほぼ中央に位置していきまして、建物は平成 7 年 12 月に竣工し、翌年 4 月に開館しました。

大学の 24 時間研究環境に合わせて、図書館も 24 時間開館を実施しています。休館日はなく、年中無休で開館しています。このことは、図書館利用細則の第 4 条に「開館日は毎日とする」、そして第 5 条に「開館時間は終日とする」と定めています。平日の午後 5 時から 8 時までの時間外は、カウンターに学生のパート職員 1 人を配置していますが、夜間や休日においては無人となっています。

建物は鉄筋コンクリート 3 階建てです。国立大学にしては珍しく豪華な造りで、エントランスホールの廊下とか、壁、それから吹抜け部分の壁はイタリア産の天然大理石を使用しております。延べ床面積は約 2,200㎡、閲覧席数は 130 席あります。JAIST 附属図書館は研究図書館という位置づけで、学習図書館的な機能はありませんので、座席数は非常に少なくなっております。

図書収容可能冊数は約 10 万 3,000 冊。すべてオープンフロアで、書庫はありません。蔵書冊数は、図書・製本雑誌合わせて約 9 万 5,000 冊あります。

このうちの約 25% は研究室に配架されています。所蔵雑誌総タイトル数は約 1,200 タイトルございます。

概要はこのくらいにいたしまして、24 時間開館サービスの現状を述べていくことにいたします。

まず図書館の利用対象者ですが、平成 13 年 5 月 1 日現在、JAIST の教職員、学生合わせて 1,350 人ほどいます。内訳は教員 203 人、職員 165 人、学生は前期課程、後期課程合わせて 982 人です。当然のことですが、大学院大学のため、学部生はいません。なお、学外者にも公開しております。学外者についてはまた後ほどご説明したいと思います。

次に利用環境についてですが、24 時間開館に対応した設備、機器の導入となっております。まずキャンパス内の校舎は、夜間・休日に入る場合には身分証明証とか、学生証などの ID カードと暗証番号が必要なシステムになっています。図書館の正面玄関は、18 時以降は ID カードがないと入ることができません。しかし、隣接している学生会館側の入口は 20 時まで開いていますので、ID カードを持っていなくても、その入口から通路を通過して図書館に入ることができます。

次に図書館内のセキュリティシステムについてご説明したいと思います。

入退館管理システムは、オムロンのアクセスゲートを導入しています。ブックディテクションシステムは 3M のモデル 3801 です。監視カメラは、ビデオテープによるアラーム録画方式で、NEC のものを使っています。ゲートの入口と出口、AV メディア室の 3 画面を収録しています。

入館ゲートは導入されている大学も増えてきていますので、御存じのところもあるかと思いますが、入館ゲートの扉は ID カードの職員証、学生証、学外者用図書館利用証に付けられた有効期限を読み取って開きます。そして、ID カードに付けられた身分コードにより、入館統計情報がパソコンで得られるようになっていきます。ID カードを使用せずにゲートを突破しようとしますと、アラームが鳴り、ビデオ録画されます。ビデオレコー

ダーは事務室内にあり、モニターすることもできます。

退館ゲートは、ブックディテクションシステムと連動していき、資料を無断で持ち出そうとしますと、資料には磁気テープが貼ってありますので、またアラームが鳴り、ビデオ録画されます。

なお、退館者の統計情報は取っていませんので、利用者はIDカードを出口に挿入する必要なく、そのまま出ることができます。

自動貸出装置は3M社のPSCモデル5220を1台導入しています。PSCと図書館システム、図書館システムは富士通iLiswaveを使っていますが、この間はオンライン処理となっています。この装置で利用者には終日セルフサービスで貸出手続きをしてもらっています。貸出冊数に制限はありませんので、延滞がない限り、何冊でも貸出が可能となっています。

照明は、夜8時以降は、人感センサーによりブロックごとに人の動きに合わせて照明がつかまります。人感センサーを設備していない閲覧室、AVメディア室、貴重図書室には部屋ごとにスイッチがあります。

館内全体の空調は、大学全体の空調計画によりコントロールされており、平日の8時半から20時のみ運転しています。ただし、閲覧室、AVメディア室は単独空調のため、終日、極端なことを言えば、365日利用ができます。ただ、18時以降は2時間ごとに自動停止するようになっていますので、続けて利用したいときには電源を入れる必要があります。

その他としまして、3階は主に雑誌の書架フロアになっていますが、平成11年3月に導入しました集密書架は、無人時の事故を防ぐために、電動式ではなく、手動式をあえて採用しています。

夜間には防災センターの職員が定期的に見回りを行っています。防災センターとの連携はとても大切で、例えば利用者がゲートを通る際に、学生証または職員証を地下鉄のゲートのように挿入するのですが、ごくまれに中から出てこないことが起こります。無人時にそのようなことが起こっ

た場合、利用者はカウンターの上にある電話で防災センターに連絡します。すると、防災センターの警備員が図書館に来て、鍵がどこにあるか警備員は知っていますので、その鍵で開けてカードを取り出し、利用者に渡していただくようにしてあります。内線用の電話は、ブラウジングや2階、3階にも設けてありまして、非常時の連絡ができるようになっています。

「休日や夜間は無人となっている」と冒頭にも述べましたが、では無人時における利用サービスはどのようになっているか疑問に思われているのではないかと思います。

閲覧・貸出・複写などの基本的なサービスは、全面開架方式、自動貸出装置の導入により可能となっています。複写は、学生も研究室のコピーカードが使用できますので、そのコピーカードがあれば、いつでもコピーができます。

また返却は、有人、無人にかかわらず、「返却ブックポスト」に投函する方法をとっています。平日の朝8時半に職員が、夕方5時には学生のパート職員が返却処理をしています。

情報検索は、学生は研究室におおむね1人1台の個人用ワークステーション—WindowsやMacのところもあるのですが—が提供されていますので、学生は研究室でのOPACの利用や電子ジャーナル、オンライン対応のCD-ROMへのアクセスももちろん可能となっていますが、図書館内にはWeb OPAC、貸出状況照会用としてのパソコンが各階に置いてありますし、またAVメディア室にはスタンドアロンタイプのCD-ROMやネットワーク対応のCD-ROMのパソコンが置いてありますので、いつでも利用できます。

これらのパソコンは、システム仕様制限ツールの「ポリシー・エディタ」、PC環境復元機能で再起動後最初に設定していた環境に戻る機能の「セキュリティカード」で管理しています。なお、ビデオ、テレビの視聴も可能です。

他機関に依頼した文献複写で公費扱いのものは、これは前事務局長が命名したのですが、「ボックス配付」と言いまして、カウンター横に研究科別

に木製の箱が置いてあります。その中に名前を書いた封筒が入れてありますので、いつでもカウンターに取りに来ることができるようになっていきます。

利用できないサービスは幾つかありまして、一つは貸出の更新です。自動貸出装置のPSCには貸出更新の機能がありませんので、カウンターに人がいるときにしか貸出更新のサービスができません。また、レファレンスや他機関に依頼した図書及び私費による文献複写の引渡し、本学所蔵資料の私費による文献複写も利用できません。

なお、貴重図書室の利用は平日の5時までとなっています。

学外者への公開ですが、学外者には開館当初から利用目的に応じて図書館を24時間公開しています。

利用形態は当日利用と長期利用の2種類があります。当日利用の入館受付は平日の午前8時半から午後8時までですが、退館するのは自由で、朝までいてもOKです。ただ、一度出てしましますと、再入館することはできません。長期利用は、所蔵資料による調査研究を目的とし、利用が頻繁かつ長期にわたる学外者に対して図書館利用証を発行しています。この利用証は、午後8時以降や土曜・日曜・祝日に建物の中に入るためと、入館ゲートを通すために使用するものです。

サービス内容は、閲覧及び情報検索です。文献複写の受付は平日の9時から16時までとなっています。貸出は現在行っておりません。貸出の運用については現在準備中で、今年中に実施の予定をしております。

次に利用状況がどのようなになっているかということですが、図表を使って説明したいと思います。

ここで言う入館者は、IDカードを利用してゲートを通した人の人数であって、カウンターに立ち寄るだけの来館者や見学者などは除いております。

上の図が過去5年間の入館者の推移で、下の図が過去5年間の貸出冊数の推移です。この入館者の推移のグラフからもわかりますように、入館者

は学生が増加するにつれ年々増加しています。と言いたいのですが、昨年はなぜか減少いたしました。というより、11年度の学生が異常に熱心だったのかもしれない。貸出冊数のグラフも入館者の推移と同様に年々増加傾向にありましたが、こちらも昨年は少し減りました。どちらも減った原因は不明ですが、この辺で落ち着いてきているのかもしれない。貸出冊数に制限はないのですが、入館者の推移と似たようなグラフになっております。教職員のほうは、どちらも学生に比べてそれほど大きな推移の変化は見られません。

次に過去5年間の昼夜別入館者数の推移ですが、昼間を午前8時から午後8時まで、夜間を午後8時から午前8時までとして、入館者の推移を見ますと、夜間の利用者はどの年も約3割います。

「図3」は、どの年度も同じような感じになりますので、平成12年度だけを取り上げてみました。20時から24時、0時から8時の入館者数はこのようになっています。どのときもほとんど学生に利用されていることがわかります。

「表1」は12年度の夜間時間帯別入館者の内訳です。1時間ごとに表をつくると、ちょっと見づらいので、2時間ごとの人数にしていますが、学生は1年を通じてどの時間帯にも入館しています。少数ですが、学外者も深夜に利用していることがわかります。

「図4」は月別入館者統計です。休日も約2割の利用があり、そのうちの約9割が学生で、24時間・年中無休のサービスは学生にとって不可欠なものとなっています。学生の利用は4月から7月の利用が多く、この4か月間で年間の半分の利用があります。大学の授業がクォーター制を導入して、1期間8週間の講義期間が3期間あり、2期間あるこの時期の利用がやはり最も多くなっています。ちなみに、夏休みは8月の1か月間だけとなっております。

また、時間別の表はここでは出しませんでした。学生は午前中には講義があるため、午後から夜間にかけての利用が多くなっています。試験が期間ごとにあるため、朝まで利用している学生も

多くいます。JAISTは入学するのは簡単ですが、入学してからは相当勉強しなければならないシステムになっていますので、図書館が24時間開館している意義はあると言えます。

「図5」は学外者の利用証申請数の推移です。学外者の長期利用申請は約80から90と安定していき、そのうちの約7割が一般企業、教育・官庁関係者で、周辺の企業の方や高校の先生などが多く利用されています。

「図6」は長期利用の学外者の平成12年度月別入館者のグラフですが、平日の利用は8月が最も多くなっています、休日は7月の利用が最も多くなっています。申請の受付はその都度行っていますが、ちなみに今年度の申請者は現在までに72人となっています。

今後の課題は、機器類のトラブルも頭の痛い問題ですけれども、目下の課題は機器の更新です。レジュメの43ページにも昨年実施したアンケートの一部を載せてありますが、貸出のセルフサービスには満足しながらも、装置のトラブルや使い勝手が悪いために、不満をもっている人が多くいました。

現在使用している自動貸出装置は、カードリーダーによる認証方式のため、カードの通し方が悪い場合に「カードエラー」となり、システムが落ちてトラブルとなりますが、無人時にはシステムを立ち上げ直すことはできません。そのときは、机の上にある「図書貸出記録簿」に学生番号または職員番号と図書のID番号を記入する方法をとっています。このようなトラブルに対しては、銀行のATMのように、カードを中に挿入する方式の自動貸出装置を導入するしか解決法がないわけで、それにはまず予算を確保する必要があります。

また、セキュリティの強化も今後の課題です。正直に申しまして、JAIST図書館は決してセキュリティの高い図書館ではありません。ゲートを通り抜けて退館しようと思えばできますし、本の無断持ち出しもちょっと考えればできてしまいます。セキュリティ強化のために、防犯カメラを最大16画面収録できるデジタル式に替えたいのですが、

これもお金次第ということになります。しかし、たとえデジタル式に替えることができたとしても、これで完ぺきというわけではないと思います。現在は利用者のモラルを信じて運営しているわけですけれども、今後は利用者のモラル向上の対策も課題になってくると思われます。

「おわりに」ということで、開館時間を24時間としている図書館は1996年度は国立大学が8大学だけでしたが、1999年度は国立大学が15大学、私立大学が3大学と増えています。各大学の実情は統計やホームページからは何をしているのかは伺い知ることはあまりできませんが、当館が他館と最も違うと思われる点は、図書館ができる以前から「24時間・年中無休開館」の方針が決定していたことで、また、それを基本コンセプトの一つにして、24時間を特別なことではなく、当たり前のこととして運営していることだと思います。その点を強調して発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

座長：

どうもありがとうございました。JAISTは24時間365日開館されている、それをやるためのシステマ的なつくりと人的資源の配置の問題、その他運営されての具体的なトラブルと今後の方向、いろいろなことをご報告いただいたんですが、ここについてもう少し聞いてみたいとか、ご意見がございましたら、どうぞ遠慮なくお手を挙げてください。

川森静子：

一橋大学の閲覧係にいます。「まれにIDカードがゲートに入って出てこなくなる」とおっしゃっていましたが、防災センターからは何分くらいで駆けつけてくるんですか。

中本悦子：

5分もかからないと思います。

川森静子：

全然別のところに……。

中本悦子：

ええ、全然別の建物に入っております。

川森静子：

大学専用の……。

中本悦子：

はい、専用です。

川森静子：

あと、ちょっと小さいことですが、当日見て返すというときには、学生が元の棚に戻すんですか。

中本悦子：

ええ、一応セルフサービスという形をとっていますので、元の場所がわかる学生には「元の場所に返してください」と言っています。それがわからないときは、こういった返本台というのが置いてありまして、そこに積み上げるようにしてもらっています。それは朝8時半のときに一緒に片付けるようにしています。

川森静子：

返本作業というのはかなり多いんですか。

中本悦子：

いえ、そんなには……。朝すれば、それほど大変なことではないです。ただ、元の棚には戻しているんですが、棚の一番隅、後ろのところに置いてあることのほうが多いので……。朝の掃除の際に大抵気がつきますので、乱れを直す程度です。

川森静子：

乱れ直しというのは定期的にやっちらっしゃるんですか。

中本悦子：

毎朝やっております。蔵書冊数が少ないというか、小じんまりした図書館ですので、朝やれば何とかやれます。

川森静子：

図書と雑誌の貸出というのはどちらのほうが多いんですか。

中本悦子：

雑誌は3階にあるんですけども、ほとんどコピーでやっています。先ほど言いましたように、研究室の(コピー)カードが使えますので、貸出はほとんどありません。「返却ブックポスト」に入っているときがありますけれども、ごくまれです。

神田哲広：

東洋大学の神田と申します。「常に開けていて、常に利用者がいる」ということでしたが、蔵書点検はどの時期に行うのでしょうか。また、その不都合とかがありましたら、教えてください。

中本悦子：

蔵書点検というのはしなければならぬんですが、今のところまだ行ったことがありません。まだ6年目で、サンプル調査はしたことがあるんですが、蔵書点検というのはまだ行ったことがありません。

横部正良：

京都産業大学の横部と申します。「自動貸出装置がダウンした場合には手書きで持って出る」ということでしたけれども、その場合、ゲートでビデオが動いたり、あるいはブザーが鳴ったりということが当然あると思うんですけども、その解決はどのようにされているのか。

中本悦子：

「紙に書いてありさえすれば、ブザーが鳴って

も出ていってもいいです」と図書館ツアーで説明しています。図書館ツアーに参加していない学生がいて、「持ち出そうとしたらブザーが鳴ってしまったので、また元のところに返しておきました」というときもありますが、ダウンしているときは5、6枚紙に書いてありますので、大抵の学生はそれがわかっている、ということだと思います。

神田哲広：

もう1点、無人のときに地震とか、火災とか、何が起こるかわからないわけですが、そういう場合の対応も防災センターがされるということですか。

中本悦子：

はい、そうです。もし何かトラブって、防災センターのほうでどうしていいかわからないときは私の自宅に（電話が）かかってくるようになっていきますので、かかってきたときはヒヤッとしますが、今のところは大したトラブルは起こっていません。

神田哲広：

防災センターには何名の方がおられるんでしょうか。

中本悦子：

はっきりしたことはわからないんですが、4～5人いそうです。

東山陽光：

國學院の東山です。24時間のうち無人の時間帯のほうが長くて、専門職の人が一人もいらっしゃらないわけですね。おそらく研究テーマ、ディスプレイからして、ツールさえ備わっていれば、それなりの学生ですから、いろいろなことが自分で処理できるんでしょうけれども、一番気になりますのは、レファレンスの滞貨というのはないのか、そういうものについてはどこまで対応してい

るのか。そういうことはほとんど自分で処理できるような学生のレベルなのか。学生だけでなく、当然教員もいるはずなので、そのへんがちょっと気になるんです。

中本悦子：

（利用者に対して）即答はできませんが、メールが入っていますので、朝開いて、返事をしたりしています。もしメールでちょっと説明しにくいというときは、「日中に図書館に来てください」というメールを出しています。そういうときはメールしか手段がないです。「とにかく入れておいてください」という感じです。

東山陽光：

これがずうっと進んでいきますと、無人図書館で24時間全く人がいない。メールで今やっている面接の部分を全部済ませてしまう。そのへんのところまでお考えなのかどうか……。

中本悦子：

そんなことは考えておりません。やはり人的な交流は大事だと思っていますので、そんな一方通行のことは……。メールではなかなか説明できないということがありますので、やはりなるべく対面で説明しようと努力しています。

座長：

では、そろそろ時間になってまいりましたので、本日分科会の最後の第7セッションの発表を以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

座長：

今から約30分、分科会のまとめに入らせていただきます。

初日の朝に申しあげましたように、発表の流れは、ネットワーク環境の大きなフレームの考察から学術コミュニティ、コミュニケーションの変化、電子ジャーナルの課題、都市間コンソーシアムへ